

本当の PECS (ベクス)

京都市児童福祉センター 門 眞一郎

TEACCH プログラムは、わが国では毀誉褒貶にさらされている。私は、とてもすぐれた包括的プログラムであると思っているが、世の中には、専門家と呼ばれる人たちの中にも、TEACCH をよく言わない人があちこちに存在する。そういう人たちは、たいてい TEACCH についてろくに学びもしないで、ケチをつける輩である。自分の不勉強、無理解を棚に上げて、難癖をつけるのである。私には、嫉妬深い狭量な人たちとしか思えない。嫉妬心ほど始末におえないものはない。Shit!!!

ところで、わが国で TEACCH を誤解し、見当違いの批判をする人たちに向けて、TEACCH とは何かということについて丁寧に説明した本を、TEACCH に関するわが国の第一人者の一人である内山登紀夫先生が最近上梓された。学研から出た『本当の TEACCH』である。これはとてもすぐれた本であり、できるだけ多くの人に是非読んでほしい本である（これは皮肉ではなく本心で言っているので誤解なきように）。よい本なのであるが、残念ながら PECS（絵カード交換式コミュニケーション・システム）についてお書きになっている箇所は、私には納得できないのである。すなわち、次の2箇所である。

まず、ショプラー先生へのインタビューの中で、『PECS との関係』という見出しのもとに、内山先生は「PECS と TEACCH の手法は似ているし、同じだと思っている人もいるようだ。TEACCH と PECS は同じなのかわ違うのかを聞いてみた。」と質問内容を説明し、その後にショプラー先生の返答を載せている。

「ボンディ〔PECS の開発者の一人、アンディ・ボンディのこと：引用者注〕は TEACCH で構造化された指導を学んだうえで、PECS を始めた。視覚支援を使うという点では TEACCH とオーバーラップする部分が多すぎる。ただ PECS がめざすのはコミュニケーションであり、絵カードの交換を重視する。TEACCH は広範囲のホリスティック（全体的）なアプローチを使う。私たちはコミュニケーションだけでなく、多くのほかの生活スキルに焦点をあてる。それが PECS とは大きく異なる点であろう。」(P.174-175)

次に、メジボフ教授へのインタビューでは、質問の形では書かれていないが、『PECS/ユニバーサルデザイン』という見出しで、メジボフ教授の返答を載せている。

「PECS の考案者のボンディはノースカロライナの大学の出身で、長年にわたり TEACCH に詳しかった。彼が TEACCH の方法から影響を受けたことも考えられるし、TEACCH も確かにボンディの実績に影響を受けた。

PECS は TEACCH の視覚的な方法と彼のバックグラウンドである ABA〔応用行動分析：引用者注〕の考えから影響を受けた。しかし、TEACCH と違う点は、コミュニケーション

の領域のみに焦点を当てていることだ。ボンディ博士は TEACCH の視覚的支援の有効性について話していることが多いようだし、彼のシステムは非常に印象深く、効果的だ。TEACCH と PECS の間には多くの共通点があるが、PECS は長く複雑な文章を使うコミュニケーションを重視する傾向がある。それに比べて TEACCH は、他者に対して自分の要求を伝える能力が限定されている子どもが、自分の要求のエッセンスをコミュニケーションできることに焦点を当てている。

TEACCH も PECS も、とりわけことばを持たない人々に対する有効なコミュニケーションシステムを開発してきた。どちらも人と人の意思の交換という意味でのコミュニケーションに焦点をあて、自閉症の子どもが具体的で明白な意思の交換ができるようにしている。TEACCH も PECS もコミュニケーションを促進するために作られ、両方がそのゴールを効果的に達成している。(中略)

PECS やユニバーサルデザインは TEACCH が行っていることの一部分にのみ焦点をあてており、TEACCH はこの二つよりもずっと広範囲の包括的なアプローチであることは言うまでもない。(P.182-183)

《構造化》は TEACCH プログラムの中で用いられる 1 つの技法である。しかし TEACCH プログラム自体は、単なる 1 つの技法ではなく、自閉症スペクトラムおよび関連するコミュニケーション障害の人への包括的な支援プログラムである。しかも、ノースカロライナ州全州にわたって提供される、いわば行政施策のようなものだと私は理解している。だから「構造化 = TEACCH」ではないことは、論理的に考えればすぐにわかることである。

同様に PECS は、DAP (デラウェア州自閉症プログラム) の中で用いられる 1 つのトレーニング手順、すなわち 1 つの技法である。PECS は、コミュニケーション障害の人に自発的なコミュニケーションを教えるための指導手順である。しかし DAP 自体は、単なる 1 つの技法ではなく、教育上の分類が自閉症とされた子どもや青年(21 歳まで)のための教育プログラムである。これもデラウェア州全州にわたる教育施策である。

以上の図式から考えると、PECS と TEACCH とを同じ土俵で比較することが論理的でないことは明らかである。同じく、構造化と DAP とを比較するのも論理的ではない。比較したければ、DAP と TEACCH とを比較すべきであり、PECS と TEACCH とではない。

ついでに書くと、内山先生の PECS 理解が私には疑問に思える箇所がもう 1 つある。

「プレスクールでは絵カードによるコミュニケーション指導をよくする。このような方法は PECS と似ているが、TEACCH プログラムでは PECS ほど文法の正確さにこだわらない。」(P.52)

私の理解がまちがっていなければ、PECS は文法の正確さにこだわってはいないと思

う。文法はどうでもいいと思っているわけではないだろうが、特別にこだわっているとは思えない。PECS がこだわるのは、「自発的に機能的コミュニケーションができるようになる」という点ではないかと私は思っている。

(2 0 0 7 . 1 . 2 1 記)

TEACCHの方がDAPよりも歴史が古いだけあって、支援範囲は確かにDAPよりも広いと思うが、アメリカ合州国における全州規模の自閉症支援プログラムとしては、TEACCHとDAPの2つしかない(らしい?)。

Volkmar, Paul, Klin, and Cohen (eds.). Handbook of Autism and Pervasive Developmental Disorders. 3rd edition.

Ch. 40. Helping Children with Autism Enter the Mainstream. by Handleman, J.S., Harris, S.L., and Martins, M.P.

p.1036には、

「全州規模のサービス」という箇所に以下のような記載がある。

デラウェア州自閉症プログラム Delaware Autistic Program (Bondy & Frost, 1994)とノースカロライナ州の自閉症及び関連コミュニケーション障害児の治療と教育 (TEACCH) (Marcus, Schopler, & Lord, 2001)とは、自閉症の子どもに全州規模のサービス提供モデルである。両プログラムは、各々の州全域で子どもたちに教育サービスを提供する責任を担っているが、両者の理念は共通している。すなわち、完全なインクルージョンから高度に専門的なプログラムまで、連続性のあるサービスが利用できなければならないということである。サービス資源を全種類そろえておくことで、制約が最も少ない環境で個別に配慮された教育を無償で適切に行なわなければならないという連邦政府の命令を実行することが、両州において可能となると考えられている。

(以下略)

(2 0 0 7 . 7 . 1 5)